

学びの風便り

リーディングスクール通信 39 R7.2.28

発行：松本市教育委員会 教育研修センター



特集！学びの改革のあゆみ 女鳥羽中学校・筑摩野中学校

女鳥羽中学校 「本当に自由に学べる教室」 1年間のあゆみ

○生徒の自己肯定感を高めたい

女鳥羽中学校の令和6年度の学校づくりは「生徒の自己肯定感を高めたい」という課題意識からスタートしました。落ち着いた学校生活を送り学習にも真面目に取り組む一方で、「自分にはいいところがあると思う」といった自己肯定感を生徒たちが十分に味わえていない傾向を先生方は重く受け止めました。

○生徒主体の学びづくり「本当に自由に学べる教室」

先生たちは、これまでの実践を問い直し、学校づくりのテーマを「本当に自由に学べる教室」とし、取り組みをスタートしました。安心して自己表出し、思いを伝え合うよさを実感する学びの場の創出、自分で内容・方法を決め考えをまとめる教科学習、地域を題材とした探究の学び「プロジェクトM」の実践など、生徒が主体的に学び合い、互いのよさを感じ合う授業づくりを重ねました。

○「自由」に学び始める生徒たち

そして1年。普明校長先生は「生徒たちが明らかに変わってきました」と話されます。「子どもたちが様々な場面で『自分』を出せるようになってきたように思います。いい意味での『子どもらしさ』が出てきました。」「自主性も育ってきています。『いわれたからやる』から『自分たちで考え、動いた』という動きが生まれています。」と、子どもたちの姿を紹介いただきました。

「岡田地区が開催する文化祭の運営ボランティアを募集したところ、3年生が19人集まりました。また、本郷地区からの募集に対して1年生が自主的に応募し、活躍する動きも生まれました。」「生徒会会長選挙の際、候補者の多くが『地域とのかかわりを深めたい』という願いを訴えました。生徒の願いを受け、次年度の学校づくりは『地域とのかかわり』をテーマに据えることになりました」



「12月には、2年生が自分の将来の夢や、

興味・関心に関連付けながら、この1年の学びや成長を振り返り報告する「アウトプット・デー」に挑戦しました。初めはとても緊張した面持ちでしたが、時に笑顔で、時に熱く語るなど、気持ちを高揚させながら表現を楽しむ姿がありました。この会に参加した1年生が1月の参観日で自分たちの『アウトプット』を行いました。『学び』の連鎖が生まれていることも嬉しく思います。」

○先生たちの「同僚性・子ども観」が深まった

校長先生は先生方についても「子どもへのまなざし（子ども観）が変わってきたのを感じます。先生たちが対話的になり、職員室も、とてもいい雰囲気です。アンケート調査で先生方の『ワーク・エンゲージメント（働きがい）』がとても高いという結果があり、嬉しく思っています。』と話されます。

先生たちのこのような変化の一つの背景として校長先生は「車座による研修会」を挙げられます。「今年は多くの研修会を『車座』で行いました。柔らかい雰囲気の中で、先生方は、子どもの背景に思いを寄せて自分の思いを語ります。いろんな見方で重層的に見て、その子のよさをわかろうという雰囲気が生まれています。このことがお互いの『子ども観』を耕す営みになっているように思います。」



課題意識を共有した、息の長い取組により、たしかに一步を刻んだ女鳥羽中学校。次年度も子どもと先生の「自由な学び」を目指した挑戦が続きます。（取材・構成 大久保和彦）

筑摩野中学校 4人グループの学びがもたらすもの

自然と対話が生まれる4人グループ

筑摩野中学校では、昨年度から「協働の学び～対話を基盤とした授業づくり～」を研究の柱に、4人グループを基本とした学びに取り組んできました。4人グループは、チラ見できる距離・すぐに聴くことができる距離・考え合える距離・安心できる距離感をもたらします。生徒も先生もこの2年の取り組みで協働の学びの良さを実感し、意識が変わってきたそうです。

どの授業でも近くの生徒と「どうのこと?」「だからさ～」「私は…」「そうか、なるほど」というように自然と会話する姿が見られます。先生に聞かなくても、すぐ近くに聴き合える仲間がいる環境と雰囲気になっています。生徒たちからは「ふと思ったことを聴きやすくなった」「友達と話すことで自信につながる」との声が上がっています。あるアンケートで「あなたは勉強を楽しいと感じたことがあるか」という質問に、学級の90%以上の生徒が「ある」と答え、その理由に「友達とわからないところを助け合えた」とありました。また、今年度の全国学力学習状況調査の学習アンケートの「私は、筋道を立てて考えたり、気づいたことを適切に伝えたりしている」の項目は約80%が肯定的な回答だったそうです。(昨年度は約60%)。これらは対話を基盤とした授業、4人グループでの協働の学びの成果の1つだと考えられます。

先生方からは、「教師の話す時間を短縮するようになり、生徒自らが学びを得ようとする姿が見られるようになり、またそれを狙った授業展開をつくるようになった」「生徒が必要感をもって学び合いをするために、学習問題や授業中の問いかけを考えるようになった」「生徒たちが会話している内容に注意深く耳を傾けるようになった」「答えを言わないように意識し、ヒントや『これはどう?』ということは言うが、教えることをしなくなった」「『周りの人と意見を共有しよう』という活動がやりやすくなった」などの声が上がっています。生徒たちの対話しながら学ぶ姿が先生方のさらなる授業づくりに生き、その授業が生徒たちをより深い学びに誘っていくというよりよい学びのサイクルにつながっているのではないのでしょうか。

村瀬先生の授業クリニックを活かして

2月12日には麻布教育ラボ所長の村瀬公胤先生のお招きし、今年度2回目の授業クリニックを行いました。教室訪問の他、1年生の数学「全体の度数が異なるデータの比較」を全職員の共同参観とし、学び合う機会としました。授業では、「これってどういうこと?」「こうすればいいのかな」などと、自然と聴き合う生徒たちの姿が多く見られました。さらに印象的だったのはGoogleスライドを使った『**学びのあしあと**』です。小単元ごとに、本時の振り返りを自分のページに残しており、授業の最後に書き込みます。自分の振り返りだけでなく、友の振り返りを真剣に見ている生徒が多くいました。今まで村瀬先生から学んできた「教科書ゴールではなく、子ども(自分)の言葉がゴール」にもつながる振り返りの時間になりました。授業懇談会や村瀬先生のお話を聴く中で、先生方も4人グループやお隣さんと意見交換する場面がたくさんあり、近くの人と考え合う良さも感じながら充実した研修の時間となりました。

村瀬先生には昨年度から合わせて4回の授業クリニックをしていただき、「深い学びとは、子どもたちが、**選び、考え、表現する学び**」であり、「正解ではなく、納得がゴール」であることをさまざまな視点から教えていただきました。

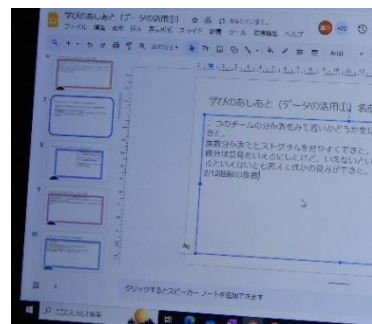
これからも対話を基盤とした授業づくりで筑摩野中学校はシンカを続けていきます。



先生たちも協働の学びで授業づくり



Googleスライドによる学びのあしあと



『村瀬先生のお話から～3つのワナにご用心～』

1『見通し』というワナ

見通しはあったほうがいいですが、できる子はもてて、そうでない子は与えてもらうことが多くないでしょうか。本当は、**見通しが立つまでが学習で、立った後は作業**です。教師が代弁せずに、「いいこと言っていたよ。グループで話してごらん。」「どうのこと?お隣さんと聴き合ってみよう。」というように、大事なことは生徒自身に発見させるのです。

2『自分で考える』というワナ

「自分で考える」=「一人っきりで考える」は、大きくて危険な誤解です。正しくは、「**自分から友とともに、友の頭を借りてでも、自分の考えを構築すること**」です。最初は1人で考えてみようと言われて、固まってしまう子どもを何とかしなければいけません。

3『基礎は教える』というワナ

先に基礎知識を与え、活用・応用をするという流れも危険です。基礎こそ、グループの対話でないと学べないのです。**自分の言葉で、自分の知識として言おうとすること、それに対して反応があることにより、初めて腑に落ちることになるのです。**基礎知識・概念はただの言葉でしかなく、自分で言葉に命を吹き込む必要があります。